

## 思考力を高める操作学習

21世紀幕明けのその3月、昭和59年4月に入学の児童は6・3・3・4の就学過程を終了することになります。文字通り、21世紀に活躍が期待される彼等に贈るべく「自ら工夫しつづける子ども」の育成という主題を設定し、その研究と授業実践とを模索して今日に至りました。

電気通信大学教授、滝沢武久先生の斬新な理論に基づくご指導は闇夜の航路に得た灯台でありました。先生の最近著「子どもの思考力」(岩波新書 59年7月刊)は私たちのための書下ろしに等しく拝読させていただきました。

旺盛な操作活動、確かな知識の獲得、その成果の定着をはじめとするメタ認知に至る学習活動が設定され、子ども達の自己活動がその中心に仕込まれていました。「できる」(成功)から「わかる」(理解)へ、さらに、理解は成功を確実なものとする、子どもの思考構造の変換(同化・調節)が反復継起する操作学習—自ら工夫しつづける子ども像はそんな所に求め得るように思えます。既習既得の知識経験の確認と、新しい問題解決に得べき知識経験とを截然と認識の上、学習すべき明確な目標を設定して効果的学習活動が生き生きと遂行されるのであります。

私たちは、滝沢先生の御教示を得て、第一年次に全体性を「考えを組み立てていく活動を求めて」(58年6月発表)に、第二年次に柔軟性を「考えをつくりかえる学習活動を求めて」(59年6月発表)にそれぞれ索め、各年次の到達を逐次報告発表し、ご指導をお願いして参りました。第三年次には自己制御性を設定し、3年間にわたる研究と授業実践とを「思考力を高める操作学習」にまとめ、先学諸賢の厳しいご批評を得べく上梓することになりました。

本校は、早く、昭和43年に「主体性から創造性への学習過程」を世に問うてこのかた、本書を以って第7冊を数えます。進取の精神に富んだ先輩諸子の築かれた研究成果の驥尾に付すべく、本校教官の一丸となった研修会が日夜間断なく続けられました。「学者の仕事はじみである。目覚しく世人を驚かすやうなことは無い。」は、大日本国語辞典の刊行を絶大な国家的事業と評価した芳賀矢一博士の序文の一節であります。本校教官の研修は学者をそのまま置き換えることで成立つ程、静かに、じみに行われてきました。今日、上梓を目睫の間に控え、草稿の手直し点検にいそしむ教官諸子の表情は、難事をのり超えた者のみか有つ晴れやかさが見られます。

先学諸賢には他山の石ともなるべき、所謂一隅を照らす研究に取組んだ3年でありました。勿論、一隅の管見に墮するの愚を避くべく、相互の衆知を聚めた切磋琢磨に心を致し、先輩に教えを乞い、本学の教官各位に昼夜を問わずご指導を仰ぎました。一葉開けて天下の春を得ると心ひそかに期待した研究成果の上梓も、今、筆を擱くに当たって顧みれば、求むべき子ども像の一面を設定したに過ぎないことを知り、学問研究の深遠を今更ながら痛切に感じ直すのであります。書を成すは恥を書くに等しと自戒すると共に、恥を雪ぐべく新たな闘志を湧きあがらせていることもまた確かであります。さらに「拳一隅不<sub>下</sub>以<sub>三</sub>隅反<sub>上</sub>」に連なる研究を期して精進することを誓うものでもあります。今後一層のご鞭撻と厳しいご批評をお願いして他日に備えたく存じます。

さて、許多の先達の学恩に支えられて小著は成りました。滝沢先生の遠路にも不拘、本校まで足を運んで下さったのご指導の他、電話による問合せの失礼にも快く応じていただいた親身なご指導にまず厚くお礼を申し上げます。本研究の路線を敷設いただいた前校長林昌三先生、微に入り細を穿った疑問解決に快く指導助言下さった本校先輩の諸先生、理論と実践を厳しく点検批評いただいた本が宇教官各位、私たちの小著を成すにご後援賜った方々は枚挙にいとまがありません。四恩師恩衆恩の有難さをしみじみと感じつつ駄文を草しております。

最後に、私たちの小著をご快諾下さった明治図書の江部満氏と樋口雅子氏、大先輩として序文を賜り、花を添えて下さった前学長の大賀一夫先生、記して厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和60年1月28日  
福岡教育大学附属久留米小学校  
校長 笠 栄治